

氏名（本籍）	サツ 作	タ 田	コウ 弘	ジ 治	（神奈川県）
学位の種類	博士（美術）				
学位記番号	博美第87号				
学位授与年月日	平成13年3月28日				
学位論文等題目	作品・演目 生命の領域 論文 生命に照応する芸術				
論文等審査委員					
（主査）	東京芸術大学	教授	（美術学部）	絹谷幸二	
（論文第1副査）	”	”	（ ” ）	大沼映夫	
（作品第1副査）	”	”	（ ” ）	中西夏之	
（副査）	”	”	（ ” ）	佐藤一郎	
（ ” ）	”	助教授	（ ” ）	井村彰	
（ ” ）	”	”	（ ” ）	坂田哲也	
（ ” ）	”	”	（ ” ）	坂口寛敏	

（論文内容の要旨）

「生命に照応する芸術」

油画という平面を基本に現在、創作する立体作品への変遷と、これまで導かれてきた経緯を振り返りながら、作品制作における重要な骨格と命題を、この論文を通して明確にしたいと考える。

私自身の創造の目標とともに「生きる」という行為についての問題を身の回りに存在する造形物の創造の歴史を通して探し出す。また人間の「生」の象徴となる創造上のキーワードを検証しながら、その真意を認知したいと思う。

私自身の心象世界からなる感覚的な作業と技法に対しての探究から成る学習により、これからの芸術にどのように関わり、一般社会の中で実践していくか、またこの問いに対して本当の解答に導いてくれるのは人間のさまざまな「行為」であると考えことから、自らの制作の過程を記すことで少しでも解答に近づけるよう作品例をあげ、制作技法と素材について列記することにする。

平面制作から立体制作へ

私自身を育んだ「絵画」という創造の発祥点について考察する。油画制作において影響を受けた「キュビズム」からさまざまな制作技法の可能性に着眼し、またキャンパスに行ってきた行為と素材への探究によって展開した創作の経緯を技術的な観点と構造原理から補足しながら解説する。「創造の大地」ともいうべき他の芸術分野や製造、生産の世界にモチーフを通じて興味を抱いたことから新領域で学習する。そこでの経験を明確にしながら表現の出発点である絵画の基本

や空間表現が3次元の立体作品に展開される過程について考察する。

立体表現を試みてからの初めての大型作品であり、自らの一大転機となった「サンクチュアリ（自然保護地区）- 大浦食堂の柱を使って -」の制作過程を記し、自らの「リアリティ」を形作る行程を解説していく。

新たな創造への飛躍

「サンクチュアリ」の制作より建築的彫刻作品を意識的に制作し始める。作品そのものの空間性から設置される現場の環境に対し創造の課題が発展する。そのことが公共性をもった日常的空間や環境にどのような意味や影響をもたらすか、新たな問題が私自身の創造に別の観点とインスピレーションを与える。素材への関心とともにそれらが加工される制作工房が自らの創造世界に現実性を与え、具体的な制作方法を実現する切っ掛けとなった。

関ヶ原石材および東京芸術大学、工芸科鍛金工房で指導をうける。そうした実践的な金属素材の研究を通し、物理的な「構造」の中に造形の美しさを見つけ、「展示空間」にもより精度のある意識的な展示を展開する結果となる。また金属作品以降、意図的に実践した、東京芸術大学美術学部展示スペース内における展示作品についてと、現在に至るテーマを記す。

技法と素材について

「技法」と「素材」から私自身の創作の根本を作品の経緯とともに綿密に検証する。絵画の基本構造をもとに、それらを構成する素材の特質と専門的技法によって平面から立体へ移行する過程を具体的に記したい。

制作の過程に重要な意味をもつ技法は人の創造の偉大な事実を伝承するものであり、素材の性質を理解するまでの加工行為は、私自身の根底と向き合い創造の本質を引き出すことに繋がる。そうした現実の行為によって認識される関係を検証し、自らのリアリティをここに表現したく思う。また素材を取り巻く環境や創造空間が、技法とともに独自の創造性の要因となって実現したこともここに記したい。これをまとめることは、自らにとっても大変意義のあることと考えている。

創造の源とは

現在までの制作を通し、自らの考える「創造の源」を検証する。平面制作において影響を受けた「キュビズム」から「過程」というキーワードに注目し、事物と事物の間にある「空間（関係）」から芸術作品が創造されることを証明していく。また「芸術」と「人間の生命」の関係にも焦点をあて、繋がりを考えていく。

このように創造の過程からさまざまな関係が生じ、その関係から得るインスピレーションは、現実の行為にある種の方角性を私自身に与えてきた。そのことにより人間の生命を理解する意味でこの創作というフィジカルな行為は自らを過去から未来へ繋いでいく架け橋となりえる、重要な現実である。そしてそこから生まれた作品は生命の象徴となりうる実在感から「生きた作品」となる。また実在感をもった造形物および物体は、そのものの意志やなんらかの働きかけによって「生」を感じとらせる存在として現実に成り立つものであると考える。

私の考える「生きた制作」という行為のあり方は常に現実と向き合い、関係の概念からなる、

さまざまな状況を創作に活用できるよう模索し続け、心身の行為から生み出される作品こそ私の「生」を象徴する「生きた作品」になりえると考える。

この論文にて、制作を通して得られた経験と学習を、さまざまな「言葉」にまとめ記したい。そしてこの東京芸術大学で学んだことを自らの指針にしたいと思う。

また、この博士論文要旨および本論文の制作にあたり東京芸術大学、油画科の先生方をはじめ他の美術学部の先生方の御指導をいただいたことに感謝いたします。